

「本部」革マル反動分子の**決定的な裏切りの紋章**

ブルトレ手当を徹底返上強制弾劾せよ!



82. 8. 13

No. 1121

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五(六・八会衆) 〇三三〇七二七〇七

動労本部が38回全国大会方針(案)を批判する

まぎら

前号で、われわれは、「本部」革マル反動分子が臨調・行革攻撃に国鉄労働運動解体攻撃に対して「不退転の決意」をもって対決し闘うのではなくして、百八十度逆転して「国鉄が民営・分割されたため」なる国鉄当局と支配者たちのドウカツより以上のドウカツ(唯一のお題目)をふりかざすことをもって、だから「職場と仕事と生活を守る闘い」へひだから「働こう運動」へひだから「臨調答申・緊急措置11項目実施攻撃への全面屈服・協力」をもって、際限のない屈服と裏切りの道へころがりこんだことについて明らかにした。今号では、あの悪名高き「働こう運動」の必然的な結果である「本部」革マル反動分子によって行われた「6月30日深夜の方針転換」ブルトレ手当返上強制」決定の裏切りについて、その犯罪性をあばき、徹底的に断罪する。

「返上しない問題は問題ではない」と言いつつ返上を強制——そして、「挑発にのるな」「勝てない」「国労や総評が悪い」と居直る方針案ノ

「本部」革マル分子は「大会方針案」の中で、ブルトレ手当返上という大裏切りについて次のように弁解し居直っている。

①今日の階級情勢と力関係を考えて「戻入」とした。

②拒否することだけが正しいとは限らない。

③「ブルトレ問題」のみを自立化させて方針を考へることは、敵の攻撃の術中に陥ることだ。

また、より具体的反動的な彼らの「見解」が『動力車新聞』第一四二九号の「主張」欄で展開されているが、これをも合わせると、

④本格的な攻撃は秋以降から始まるのだ。

⑤「返上」は、一歩後退だ。「一歩後退」は敗北ではない。

⑥ブルトレ問題を「権利(既得権)の問題」として争っても勝利の展望はない。

⑦政府・支配者との全面戦争を回避するために「返上」の道をとった。

⑧労働運動全体の力量を高めることなくして、われわれの勝利はない。(動労に責任はない) というのである。

「ブルトレ手当返上」こそ、既得権全面返上ノ全面屈服への「第一歩」

なんという居直りだ!

誰が見ても、今回の「ブルトレ手当返上決定」が、あらゆる意味で、労働組合として越えてはならない一線を踏み越えた根本的な屈服と大裏切りであることは明白ではないか。この一線をなげすめるならば、動労はもはや「労働組合」ではなくなり、

当局の代行組織「第二鉄労」へと歯止めなく変質を

とげていく以外にない。現にその危機は進行している。

彼ら「本部」革マル反動分子のこの「主張」は、

【第一に】「冬の時代論」「タコツボ論」に代表される典型的な「闘わずしての敗北前提」論であり、

【第二に】更にそれを反動的に純化して「闘うことは挑発にのる」「謀略にかかると労働者を根拠もなくおどして「だから闘ってはならない」と弾圧してまわ

る革マル式「謀略」論・日共式「挑発」論そのものである。これは労働運動・労働組合の原点——いな労働者

としての原点そのものを根本から否定し、「支配者に

さからうと非道い目に合うぞ」とおどして、永遠の屈

従を強制する重大な敵対であり、支配者の代弁である。

【第三に】この「一歩後退」こそ、次の二歩、三歩の

後退に道を開き、かきにかかった敵の攻撃の激化を自

らよびこむものであり(現に敵は、これを突破口とし

て直ちに現協制度破壊をはじめ11項目攻撃の全部をか

けてきている)百歩後退ノ全面屈服へ向けての一歩だ

という点である。「他に波及させないために」と、あ

たかも、ブルトレ手当返上だけを他から切り離して考

えられるかのようなベテンをろうして「自立化させて

方針を立て」て実際は当然にも大破産しているのは他

ならぬ動労「本部」革マル反動分子ら自身ではないか。

「全面戦争回避」とは、もっと正直に表現するならば

「闘わずして全面屈服する」以外の何ものでもない。

【第四に】しかも、自らのこの大裏切りを「労働運動

全体の力量がないからだ」といって、とんでもない責任転嫁

をしてごまかし居直っているのだ。卑劣の極みだ!

動労「本部」革マル反動分子は常に、国労や総評指

導部を引き合いに出して「闘争の敗北」を理由づけ、

「自分たちは左翼的・戦闘的に牽引した」などと自画

自賛をこととしてきたのであるが、現に鉄労以外のほ

とどの組合が必死の闘いに決起している時に、自民

(裏面に続く)

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ!